

「イスラエル建国史」

24 英委任統治下の パレスチナ 1

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

第一次世界大戦の戦後処理を話し合ったパリ平和会議（ベルサイユ講和会議）の後、国際連盟は、ドイツの植民地とトルコの支配地でまだ自立できない地域の統治を主要連合国に委任した。パレスチナもその一つで、イギリスが委任統治の受任国となり、その時にパレスチナにユダヤ人国家を建設するというバルフォア宣言も再確認された。それを受けたイギリスはパレスチナの統治を軍政から民政に切り替え、初代高等弁務官としてハーバート・サムエルを任命した。ここにユダヤ人国家建設の新たな一歩が記されるが、また新しい対立も生まれてきた。

ロンドン・シオニスト会議の 開催

1920年7月、シオニスト kongress に代わる大会がロンドンで開催された。ロンドン・シオニスト会議と通称されるが、ハーバート・サムエルが高等弁務官として着任した時とほとんど同じ2日



ハーバート・サムエル

から始まり、20日まで続いた。第11回シオニスト kongress が戦前最後の会合であるから、運動家が一同に会するのは実に7年ぶりである。40カ国から280名の代表が参加し、ブランドイスが大会議長、マックス・ノルダウが名誉議長に選出され、運動を率いるナフム・ソコロフ、ハイム・ワイツマン、メナヘム・ウシシュキンの順に基調演説を行った。

会期中の7月12日には、ロスチャイルドが呼びかけ人となって、記念集会在アルバート・ホールで開かれた。実に1万人が押しかける盛況で、バルフォア卿が挨拶した。

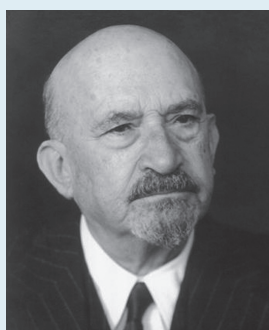
対立するワイツマンと ブランドイス

戦争をはさんで7年の間にシオニ

ズム運動は大きく前進し、平和の到来と共に運動は新しい出発の時を迎えていた。建国という大目標に向かって、全員が足並みを揃えて歩み始めるかに見えたが、このロンドン会議は深刻な対立を露呈した。

ブランドイスを初めとするアメリカ代表団は、政治目的はすでに達成されたという認識で、経済の発展に全力を尽くせと主張した。投資も経済ベース、商業ベースが筋であり、民間資本と自由企業が社会を活性化し、その発展につながるという考え方である。

これに対してワイツマンなどのヨーロッパ勢は、政治目的はまだ達成されていないとする認識で、国家再建の基礎になる社会の計画的建設はもとより、PR活動も重要と主張した。



ワイツマン

建国基金の設立

ロンドン会議では、建国基金（ケレン・ハエソッド）の設立をめぐる、特に両派の意見が衝突した。世界シオニスト機構には、すでにユダ



滝川 義人
Takigawa Yoshito

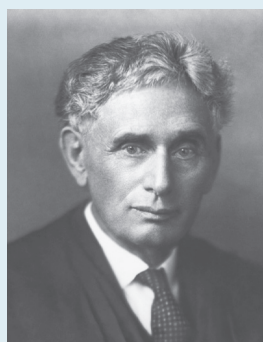
1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

ヤ民族基金（JNF ケレン・カエメット）という組織があるが、こちらの役割を土地の購入に限定し、ハエソッドは移住事業、移民の受け入れ吸収、地域開発のための基盤整備、公共性の高い企業の育成を目的とし、ワイツマンやジャボチンスキーらが趣意書にサインした。

大激論の末に、ブランドイス派はワイツマン派に押しきられ、建国基金の設立が決まった。ワイツマンらの主張は、その後建国の方針となる。



ブランドイス

しかし二人の対立はその後も続いた。基金運営の財源は寄付をベースとしたが、建国基金が集めた金の20%をJNFに与え、残る80%の1/3を移民を含む住民の教育、社会福祉、2/3を経済基盤の整備にあてることに決まった。

またJNFが取得した土地は私有化を禁じ、投機の対象にしないことになった。二つの基金団体の本部は共にロンドンに置かれたが、民族基金が1922年、建国基金が1927年にそれぞれ本部をエルサレムに移した。

サムエルとディーデス

1920年6月30日に現地入りしたハーバート・サムエルは翌7月1日から高等弁務官としての職務についた。着任とともにパレスチナ軍政部は廃止となり、初代高等弁務官は行政と司法の確立に重点をおいた。

行政面では、諮問委員会（英人官憲11名、イスラム教徒4名、キリス

ト教徒およびユダヤ教徒各3名の構成)をおき、補佐役の官房長官には、サー・ウィンダム・ディーデスが就任した。英軍准将のディーデスは、大戦時遠征軍のカイロ司令部で情報担当として勤務し、アレンビーと一緒にエルサレム入城を果たした。戦時はアラブの対英協力の工作責任者であったが、次第にシオニズム運動にも理解を示すようになり、アラブ、ユダヤ双方から尊敬される人物であった。



クック師

ラハム・イサク・クック師(1865～1935年)、スファルディ系がヤコブ・メール師(1856-1939)であった。共に数奇な半生を過した聖職者である。

ラトビア生まれのクック師は1904年に移住しヤッフォのラビとなった。1914年、正統派の世界組織アグダッド・イスラエルのベルリン大会に出席中戦争が勃発、スイス経由でイギリスに逃れ、戦後エルサレムに戻った人である。

一方エルサレムに生まれたメール師は、1906年にエルサレムのハハム・バシに選ばれたが、コンスタンチノーブルのハハムから就任を拒否され、商業都市として栄えたサロニカ(テッサロニキ)に移って当地のラビとして暮らした。当時サロニカのユダヤ人社会は人口8万で、市人口の大半を占める大きい共同体であった。1912年の第1バルカン戦争で、サロニカはトルコからギリシアの支配地に移り、メール師はギリシア社会の有力者と幅広い関係を築いた。エルサレム帰還はやはり戦後である。

ちなみにサロニカには、デンメー(トルコ語で背教者の意)と呼ばれるイスラム改宗者がいた。17世紀中頃に出現した偽メシア、シャブタイ・ツビ(ゼービ)信奉者の子孫である。シャブタイとその信奉者はトルコ当局の圧力でイスラムに改宗し、その子孫はイスラム教徒でありながら、シャブタイをメシアとしてあがめ、ユダヤ教の慣習を多々保持する珍しい共同体である。1923年の人口交換で、キリスト教徒はギリシア、ムスリムはトルコに移ったが、デンメーはコンスタンチノーブルやイズミルへ移り住んだ。閑話休題。



ツビ

ヒスタドルートの誕生と新しい指導者の出現

1970年代初めまでイスラエルの3大機構と呼ばれた組織がある。政府、ヒスタドルート(労働総同盟)そしてユダヤ機関である。1948年の独立まで後二者が建国の牽引力であった。

そのひとつであるヒスタドルートは、1920年12月に誕生した。それまでガリラヤ労働者委員会やサマリア地方労働者同盟といった組織が個々にありはした。さまざまな思想的背景を持つ労働者が大同団結を図ったのである。ハイファのテクニ

オン工科大敷地に集まった労働者を中心に、4453人がメンバーになった(余談になるが、工科大は1912年に建設が始まったが戦争で中断、開校は1924年)。創立大会は書記長にベングリオンを選出し、趣意書を出した。それによるとヒスタドルートは「他者の労働を搾取することなく、自ら額に汗して働き生活するパレスチナの労働者」の統一組織と位置付けし、目的を「土地の開発を促し、パレスチナの労働に影響を及ぼす経済的文化的課題に関与し、ユダヤ人労働者の社会を建設すること」にあると規定した。

ヒスタドルートは、労働者の労働条件の改善や生活水準の向上のみならず、さまざまな事業を展開した。移民の吸収、ユダヤ文化やヘブライ語の振興、産業基盤の整備などに関わり、協同組合方式の運営による建設、運輸、農業生産、医療サービスなど巨大な事業を展開するにいたったのである。

1920年は、建国事業や社会基盤の整備の方向付けができた節目の年であり、新しい指導者の活躍が始まる時であった。しかしその前途は平坦ではなかった。

2人制首席ラビの導入

初代高等弁務官はいくつかの業績を残したが、そのひとつがユダヤ人社会の宗教生活にかかわる首席ラビの制度化である。

トルコ時代ユダヤ人の宗教生活は一定の自治を認められ、コンスタンチノーブルに居住するハハム・バシ(首席聖賢の意)の指導下におかれた。ハハム・バシはトルコのスルタンが任命する仕組みである。ユダヤ人の多く居住するところではその地域社会だけのハハム・バシがおかれたが、エрецイスラエルでは、エルサレムがそれに該当し、特にリション・レ・ツィオン(シオンの第一人者)という名称で呼ばれた。スファルディ系のラビである。

しかし、ロシア、東欧からのアシュケナジ系移民が増えるにつれ、宗教上の慣習や礼拝方式の違いから、摩擦が生じるようになった。高等弁務官は、法律顧問ノーマン・ベントウィッチ(1883～1971年、後にヘブライ大副総長)を長とする検討会議の勧告を受け入れて、100人(2/3がラビ、1/3は平信徒)で構成される選挙団が、アシュケナジ系とスファルディ系の2人の首席ラビを選出する方式を採用した。この方式は現在も踏襲され、イスラエルには2人の首席ラビが存在する。

このようにして選出された初代の首席ラビが、アシュケナジ系はアブ